

心を縫ふ

——女性歌人の「衣」生活と歌——

池田三枝子

序

生活の中には様々な感情——喜び・悲しみ・怒り・嫉妬などが存在している。歌にはそうした感情が表現される。歌表現とは、生活の上に成り立ち、個人の感情を色濃く反映するものである。ところが、その感情は、儀礼・呪術といった共同体の維持・運営に関わる事柄に直接反映されることはない。したがって歌表現は、多くの場合、儀礼などとは別次元の、生活レベルにおいて成立していると言いうことができる。

我々のはかつて、〈共同幻想〉の名のもとに共同体に焦点をあて、表現のよみを試みてきた。しかし、生活の中には共同体という観点では掘り取ることができない感情がある。むしろ、共同体に還元されない個の感情こそが歌表現の本質であると言っても過言ではない。

そこで本稿では、共同体とは異なる、生活レベルに基づく表現に焦点を当て、古代の歌の表現性について考察したい。

その際、日常生活には欠かせない行為として、女性が衣を「縫ふ」ことに関わる表現を取り上げてみたい。

共同体の維持・運営に関わる事柄の多く——国見・狩りなどは、男性によって執り行われる。それに対して、女性の日常生活が共同体の表舞台に立つことはない。ゆえに、女性が恋人の衣を縫い、ほころびを繕うといった「衣」生活を歌にすることにより、共同体レベルでは捨象せざるを得ない女性の個の感情がどのように表現されるのか考えてみたい。

一 縫ふ——女性特有の行為と表現——

阿倍女郎が歌一首

A 我が背子が着せる衣の針目落ちずこもりにけらし我が心
さへ
(巻四・五一四)

右の歌の作者、阿倍女郎については伝未詳である。したがって「我が背子」が誰であるか厳密には分からないが、この歌に続いて中臣東人との贈答歌(五一五、五一六番歌)が配されていることから、とりあえずは東人を指すと考えてもよからう。

この歌では「我が背子」が着ている衣の「針目」の一つ一つに、縫い糸ばかりでなく「我が心」までがこもってしまつたら

しいと詠まれている。「針目」を問題にする以上、その衣は彼女が縫ったものであろう。衣を縫ったことにより、「針目」に心がこもってしまったと言っているのである。

注意したいのは、心のこもった場所が、衣自体ではなく、「針目」に特定されていることである。「針目」の語は万葉集中他に例を見ないが、同義語として「縫目」がある。

a 年の経ば見つつ偲へと妹が言ひし衣の縫目見れば悲しも

(巻十二・二九六七)

右の歌でも、「見れば悲しも」という心情を誘発される部位として、「妹」が手ずから縫ったのであろう「縫目」が特定されている。「縫目」を見て「偲へ」と「妹」自身が言っていることから、女性が衣を「縫ふ」という行為には女性特有の特別な意味があったことが分かる。

そこで、「縫ふ」という行為と、その表現性について考察してみたい。

まず確認する必要があるのは、それが女性にしかできない行為として認識されていたことである。万葉集中で男性が「縫ふ」ことを詠むのは、次の一首のみである。

b 草枕旅の翁と思ほして針を賜へる縫はむ物もが

(巻十八・四二二八)

これは、越前掾であった大伴池主が越中守大伴家持に贈った戯歌である。家持から針袋をもらった池主は、家持が自分を「旅の翁」と思って針をくれたのだという。「旅」という境遇にあつて縫い物をしてくれる妻がいない。また、立派な男性ならば縫い物をしてくれる女性もいようが「翁」ではいかんともしが

たい。自分を「旅」の「翁」と哀れんでせっかく針を下さったのだからその気持ちに応えて縫い物をしてみせましよう、戯れに自らを卑下してみせたのである。この歌の基底にあるのは、縫い物は女性の仕事であり、男性は縫い物などしないという一般認識である。

では、女性が衣を「縫ふ」という行為にはどのような意味があるのか。万葉歌の用例から考えてみたい。

c 古ゆ織りてし服をこの夕衣に縫ひて君待つ我を

(巻十・二〇六四)

d 足玉も手玉もゆらに織る服を君が御衣に縫ひもあへむか
も (巻十・二〇六五)

e 住吉の波豆麻の君が馬乗衣 さひづらふ漢女を据ゑて縫
へる衣ぞ (巻七・二二七三)

f 逢はむ日の形見にせよとたわやめの思ひ乱れて縫へる衣
そ (巻十五・三七五三)

c d は織女が牽牛のために衣を「縫ふ」ことを詠む七夕歌である。c は「古」から織り続けてきた布を「この夕」に縫うと詠むことで、逢会の一夜を特別なものとして待つ織女の心情を表現する。d は足玉手玉をゆらかして織った布を牽牛の来訪までに衣として縫い上げられるか案ずる歌である。逢会への期待と待つことの不安とが「縫ふ」という表現にこめられている。

周知の通り、万葉集の七夕歌の表現には、巫女が水辺で機を織りながら客神を待つという古来の習俗が反映しており、二星の逢会には織女が牽牛のための機を織り上げることが必須の要件となる。しかし、機織りだけでは不十分で、c d に見られる

ように、逢会のためにはそれを衣として「縫ふ」ことが必要であつた。縫製の如何は逢会の可否をも左右する。縫い方しだいでは違えなくなってしまう。そのために、衣をどのようにして縫ったかを表現することが、牽牛の訪れを待つ織女の心情の表現になるのだと考えられる。

手間暇かけて織った布を縫い上げて「君」に着せることで、恋は成就する。女性が衣を「縫ふ」ことは恋の成就に繋がりに、いかにして縫ったかを表現することは恋情の表現になる。

「縫ふ」ことのかかる表現性は、相手を待つ段階ばかりでなく、衣を贈った後までも続いて発揮される。e fは「縫へる衣そ(ぞ)」という結句を共有し、相手に贈った衣をいかにして縫ったか詠む歌である。eは「君」の「馬乗衣」を「さひづらふ漢女」を雇つて縫わせたという。自ら縫う歌ではないが、裁縫技術に長けた渡来人の漢氏の女性をわざわざ雇つて縫わせた衣であると主張することで、相手への恋情の強さをアピールしている。fは狭野弟上娘子が中臣宅守に贈った歌である。越前配流となつた宅守に贈る衣について、「逢はむ日の形見にせよと思ひ乱れて」縫ったものであるという。再会を期して贈る「形見」であるが、「形見にせよ」という表現には、ただ相手の帰りを待つのではなく、相手のもとへ自分自身の形代(代用品)を送り込むことで、隔絶されているはずの相手の世界に自らの存在を築こうとする、積極的な姿が看取できる。二人の別れは配流という特殊な状況下での悲別である。そこには、何としてでも相手との関係性を維持しようとする強い意思が、「思ひ乱れて」という複雑な心情と共に表明されている。

このように、「縫ふ」という行為は、歌に詠まれた時、積極的な恋情の表現となる。恋の成就を願ひ、恋人との再会を祈念し、時にはa「見つづ偶へ」、f「形見にせよ」のように男性に対する命令表現を伴う、女性主導の積極的な恋が歌われる。一般に、恋の成就を願つて女性がとる行動は、「袖振り」「袖折り返し」「床打ち払ひ」「斎瓮据ゑて」のように、待つことを前提とした呪術であることが多い。〈待つ恋〉を強いられる女性の場合、相手に直接働きかけるような具体的行動は歌われにくい。

その点、「縫ふ」という行為は、女性が主体となつて行うべき生活労働であつた。衣を「縫ふ」ことに関わる表現の中で、女性の積極的働きかけが可能となる原因は、そこにあると考えられる。縫製が女性にしかできない行為であつたからこそ、衣を「縫ふ」ことを詠む歌には、〈待つ恋〉という類型を脱した女性の心情が表現されるのである。

「縫ふ」という行為を以上のように捉えた上で、改めて次節で阿倍女郎詠の「針目」について考えてみたい。

二 針目——委ねられた女性の心——

阿倍女郎が「針目」に「心」がこもつたらしいと推量するのは、諸注の指摘する通り、「我が背子」恋しさに放心状態になつてゐることの謂であらう。放心状態になつた理由を、「心」が自らの身から離れて相手のもとに行つてしまつたからだと考へている。このような思考法は、一見、遊離魂の信仰と相似る。それ故、窪田評釈は背後に民俗信仰の存在を想定してい

る。

このことは女郎の創意ではなく、当時一般に信仰されてゐたことで、女郎はそれを応用したといふに過ぎないものではないかと思はれる。この戦争以来、出征者が護身用として身に附ける千人針と称する物も、これと同じ信仰によつてのものと思はれ、その根柢の深さを思はせられるからである。

また、澤瀉注釈や和歌文学大系も、四五句を「自分の魂」を縫いこんだと解している。

しかし「針目」にこもつたのは「魂」ではなく「心」である。阿倍女郎詠の場合、靈魂信仰とは一旦區別して考えるべきであらう。

阿倍女郎詠では、男性に贈った衣の「針目」に「心」がこもつていたと歌われている。つまり衣と共に「心」までも贈り、「心」を相手に委ねていたことになる。

「心」という語については、原義が心臓であるため、実体的に捉える表現が多いことが指摘されている。この歌もその範疇に入ることになるが、「心」を具体化する歌の中には、次のように「心」を相手に委ねることを詠む例がある。

g たらちねの母に知らえず我が持たる心はよしゑ君がまに
まに
(巻十一・二五三七)

h たらちねの母にも告らず包めりし心はよしゑ君がまにまに
に
(巻十三・三三八五)

右のg hは「心」を「君がまにまに」と詠む。「君がまにまに」とは相手の男性に対して「意のままにせよ」との意である。待

つ姿勢を崩してはいないものの、実は「母に逆らつてあなたに從うのだから……」と相手ににながしかの決意を促す表現である。

i 今更に何をか思はむうちなびく心は君に寄りにしものを
(巻四・五〇五)

j 我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我がなけ
なく
(巻四・五〇六)

右の二首は「阿倍女郎が歌二首」という題詞下所収の作である。第一首では「心」が「君」に寄つたのだから今さら物思いをしないという決意を述べる。そして第二首では「我が背子」に対しても「物な思ひそ」と促している。「心」を委ねるという表現は、二人の関係を進展させる目的で、女性から相手にながしかの決意を促す効果を持つていたのである。

一方、遊離魂の表現には、そうした効果は看取できない。

k 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋止まむ
(巻一・八八)

(巻一・八八)

l 我妹子に恋ひすべながり胸を熱み朝戸開くれば見ゆる霧
かも
(巻十二・三〇三四)

m 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ
(巻十五・三五八〇)

(巻十五・三五八〇)

右の歌は遊離魂の顕現としての霞や霧を詠む。そこに表現されるのは、k「いつへの方に我が恋止まむ」、l「恋ひすべなり」のように、恋情の終息を願ひ、恋の閉塞感に悩む姿である。m「我が立ち嘆く息と知りませ」と述べて、「君」を待つつらさを伝えるための働きかけをすることはあつても、それは

相手に決意を促す表現ではない。

このように、「心」を相手に委ねる表現と遊離魂を詠む呪術的表現との間には差異がある。おそらくその違いは、遊離魂が分割された己れの魂の一部にしか過ぎないのに対して、「心」が自己の思いの全てを意味することに拠るのであろう。遊離魂は、待つ立場にある自分の感情や状態を相手に伝えることはあっても、相手の行動を左右する力はない。それに対して、委ねられた女性の「心」には、女性の思いの全てをかけて、男性にながしかの決意を促す効果があるのである。

阿倍女郎詠の場合も、衣を贈った相手に対して、ながしかの決意を促すことになると考えられる。更に、*giri*と異なるのは、「心」を「針目」に縫い込めたことで、歌表現の上でのみ実体化された「心」が、現実の衣の「針目」として相手にも見えるものとなるのである。しかも相手の男性は現にその衣を着ている。その衣の肌触りを感じ、衣擦れの音を聞いている。両肩には重みを感じているかもしれない。単に「心」を委ねたと言われるのに比べて、身体感覚を伴う強いアピールとなる。

「心」を縫い込めるという表現は、男性に対する具体的な働きかけとして、かかる表現性を有すると考えられる。

三 紐を付く——揺るぎのない心——

中臣朝臣東人、阿倍女郎に贈る歌一首

B ひとり寝て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らに音の
みしそ泣く
(巻四・五一五)

阿倍女郎が答ふる歌一首

C 我が持てる三つ合ひに搓れる糸もちて付けてましもの今
そ悔しき
(巻四・五一六)

右のBCは、前述のA「阿倍女郎が歌一首」(巻四・五一四番歌)に続いて配される、中臣東人と阿倍女郎との贈答歌である。Bが衣の紐が絶えたことを嘆いているのに対して、Cは「三つ合ひに搓れる糸」で付ければよかったと悔やんでみせる。紐をめぐって、B「絶ゆ」/C「付く」の問答である。

Bで「絶えにし紐」を「ゆゆし」とすることについて、おおかたの注釈書は、紐が絶えるのは二人の仲が絶える前兆とする民俗信仰を想定する。

しかし、男女の仲に関わって問題にされるのは紐が解ける(結び目がほどける)か否かであり、紐が絶える(ちぎれる・取れる)ことではない。結んだ紐を解かないことは再会を誓う呪術であり、

n 我妹子が結びてし紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直に逢ふまで
(巻九・一七八九)

o 白たへの我が紐の緒の絶えぬ間に恋結びせむ逢はむ日またに
(巻十二・二八五四)

と詠まれるように、紐が絶えようが絶えまいが、再会の日まで絶対に解かないことが重要であった。とすれば、紐が絶えたことを詠むBについて、紐が解けた場合と同様に考えるわけには行かない。紐を「結ぶ/解く」という呪術と、「付く/絶ゆ」

という行為には差異があると考えられる。

そこで次に紐を「付く／絶ゆ」という行為とその表現について考えてみたい。

p 針はあれど妹しなければ付けめやと我を悩まし絶ゆる紐の緒
(巻十一・二九八二)

q 草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と付けろこれの針持し
(巻二十・四四二〇)

右のpでは「針」があっても妻がいなければ絶えた紐を付けることができないと嘆く。そのため、qの防人の妻の歌では「我が手と付けろ」と述べて、長旅に出る夫に「針」を持たせている。ここからは、女性の「手」でなければ紐を付けることができないという認識がうかがえる。衣を縫うことと同様に（或いはその一環として）、紐を縫い付けることも女性のみが行うことのできる生活労働であった。男女共に行う「結ぶ／解く」という呪術とは異なり、紐を「付く」ことは女性特有の行為なのである。

万葉集中、当該のCとpq以外で紐について「付く」と表現する歌としては、次の例がある。

r 難波道を行きて来までと我妹子が付けし紐が緒絶えにけるかも
(巻二十・四四〇四)

s 我が妹子が偲ひにせよと付けし紐糸にならとも我は解かじとよ
(巻二十・四四〇五)

右の二首は防人歌で、いずれも妻が付けた「紐」を詠む。それぞれr「難波道を行きて来まで」、s「偲ひにせよ」と「付けし紐」であるという。r「行きて来まで」という表現では、行

って帰って来るまで、どのようによ、い、せよ、というのかが省略されているが、おそらく「偲ひにせよ」に類することであろう。紐を縫い付けることのできるのが女性だけであったために、縫い付けられた紐はその女性を偲ぶ形見となることもあった。

Bで「ゆゆし」と詠まれるのも、形見の紐が絶えたことを不吉と感じたからで、紐を付けてくれた阿倍女郎を案じてのことと考えられる。無論、女性の身に何かあれば二人の仲が絶えることにも繋がるだろう。しかし、「結ぶ／解く」がその紐を結び合った男女の仲の如何に直結するのに対して、「付く／絶ゆ」の場合はその紐を縫い付けた女性の如何（生死など）がまず問題になるのである。「ゆゆし」の語は神や天皇など神聖な存在に対する畏怖の念を表現するのを基本とする。中臣東人は、紐が絶えたことを神意の顕れとして受け止め、阿倍女郎の身を案じてみせたのである。

ところが、それに対してCの阿倍女郎詠は、自分の所持する「三つ合ひに搓れる糸」で付ければよかったと極めて現実的に応じている。

当時の縫糸は左撚りの双糸（二本撚り合わせた糸）が多いというが、

t 片搓りに糸をそ我が搓る我が背子が花橘を貫かむと思ひて
(巻十・一九八七)

と詠まれるように、撚糸も日常的な女性の生活労働であった。阿倍女郎が三本撚り合わせた丈夫な糸を所持してもおかしくはない。自ら撚った糸を用い、自ら針を取って縫うことのできる女性は、縫目がほつれて紐が取れてしまっても、そこに神意を

認めるまでもなく、縫糸の問題として片づけてしまえばそれで済んだ。

そして、Cでは紐が絶えたことについて「今そ悔しき」という。万葉集中、結句に「今そ悔しき」「今し悔しも」と詠む歌は他に九例あり、一定の型を成している。

u 葛城の高間の草野はや知りて標刺さましを今そ悔しき

(巻七・二二二七)

v かく恋ひむものと知りせば我妹子に言問はましを今し悔しき

(巻十二・三二四三)

w 春日野に照れる夕日の外の方に君を相見て今そ悔しき

(巻十二・三〇〇一)

x ぬばたまの夜見し君を明るる朝逢はずまにして今そ悔しき

(巻十五・三七六九)

右はそのうちの恋歌の例である。傍線部に見るように、これらはいずれも相手に対して積極的な働きかけを行わなかったことを後悔する内容となっている。特にu、vは反実仮想「まし」を用いる点でC歌と共通するが、u「標刺さましを」、v「言問はましを」というように、「相手」を占有すればよかった「相手に求婚すればよかった」と相手に対する積極的な働きかけの具体的内容をはっきりと表明している。これらを参考にして考えれば、阿倍女郎が「三つ合ひに搓れる糸もちて付けてましもの」と述べるのも、丈夫な糸を使って紐を縫い付けることが相手に対する積極的な働きかけに相当する行為であったからであると考えられる。世間一般に用いられる縫糸ではなく、自分の所持する特別な糸で縫い付けていれば恋の成就に繋がったの

に、との後悔である。

縫目には、縫糸と共に女性の心がこめられている。縫糸が丈夫であれば心も揺るがない。揺るがない女性の心は男性を左右する。丈夫な糸で縫い付けた紐は、揺るぎのない女心の具象化となったはずであった。それなのに配慮を怠って普通の糸で縫い付けてしまったことが、阿倍女郎の「今そ悔しき」の内実であらう。

前掲の紐を「付く」ことを詠む歌の中には、q「我が手と付ける」、s「偲ひにせよ」のように命令表現が見られる。紐を「付く」という表現も、「縫ふ」ことに関わる表現の一環として、女性が主体的に男性に働きかけを行うことを可能にするものであった。そしてそれは、「縫ふ」の場合と同様に、紐を「付く」ことが女性特有の行為であったことに起因すると考えられるのである。

結 〈生活表現〉の可能性

以上、阿倍女郎関連の三首の歌を検討することにより、生活に根ざした女性特有の行為——「縫ふ」——から、女性が主体的・積極的に男性に働きかけを行うという表現が生まれることを述べてきた。

そのような表現は、個としての本音の感情の表現であると思われることができる。共同体の習俗や社会通念を背景として〈待つ女〉が観念される時代に、女性が積極的に男性に働きかけて強い愛情を表明することは、共同体には還元できない個の感情の発現にはかならない。共同体の維持・運営に機能しない代わり

に、個としての生の感情の表出が可能になるのである。

更に、個の感情の表出は、呪術性・類型性から逸脱するばかりでなく、文芸化を志向する。例えば、BCの間答には、互いに大きな表現を用いて相手をからかうような諧謔性が認められる。中臣東人は紐が絶えたことが神意の顯れであるかのよう⁽⁴⁾に言い立てて嘆いてみせた。それに對して、阿倍女郎は紐が絶えたのは自分の配慮が不足していたからであると悔やんでみせる。衣の縫製に関わる東人のからかいを逆手にとつて、紐を縫い付けるといふ女性特有の行為こそが恋の行方を決定するかのやうに歌い、自らの優位を主張したのである。つまり、Cの阿倍女郎詠からは、生活レベルの表現が、對詠の場を得て、諧謔といふ文芸性を獲得する様相が見て取れる。

このやうに、生活に根ざした行為を通して個の感情が表出される表現を「生活表現」と呼んでみたい。「生活表現」は、共同体の規制を超えて、個の感情を文芸へと昇華させる可能性を持つ。

本稿では女性に焦点を絞つて考察して来たが、「生活表現」の範囲は女性の歌表現には止まらず、生活レベルで成立する表現の全てを包括する。表現が発生する基盤を生活そのもの⁽⁵⁾に求めることで、表現の発生過程、及び表現の質を問ひ直すことになる。「生活表現」とは、表現論の新たな可能性を拓く観点であると考えられる。

注(1) 五一四番歌の第四句については、原文「入爾家長之」を

「いりにけらしな」(拾穂抄・代匠記(初稿本・精撰本))・

童蒙抄・万葉考・略解(別案)・攷証(別案)・古義・金子評釈等)、「いりにけらしも」(略解・攷証・窪田評釈・全註釈・私注・大系・注釈・集成・全訳注・釈注等)と訓む説もあるが、「こもりにけらし」と訓む説(塙本・全集・全注・新編全集・新大系・和歌大系等)に拠る。

恋人に贈る物に特別な思いを込める際に「こもる」の語を用いる例としては、次の贈答が挙げられる。

この花の一よの内に百種の言を隠れる凡ろかにすな
(藤原広嗣 卷八・一四五六)

この花の一よの内は百種の言持ちかねて折らえけらず
や (娘子 卷八・一四五七)

(2) 中臣東人は神祇伯意美麻呂の子で、和銅四年(七一)に正七位上から従五位下に叙され、式部少輔・右中弁・兵部大輔を経て、神祇伯・刑部卿に至つた人物である。この歌は、巻四の配列順からして、和銅三年(七二〇)の平城京遷都前後の頃、若き日の東人に贈られた歌であると考えられる。

(3) 衣の縫製を問題にすることは、大まかに捉えれば、生産叙事の様式と見ることもできるかもしれない。しかし、「縫ふ」といふ行為は、女性にとつて衣の製造過程の中でも特別なものであつた。例えば、現代において「裁縫」と一括されてしまふ行為のうち、万葉の女性歌人は布の縫製のみを問題にし、裁断することを詠まない。

夏影のつま屋の下に衣裁つ我妹 裏設けて我がため裁
たばやや大きに裁て (卷七・二二七八)

右のやうに、衣を仕立てる女性に對してその裁ち方を指示する男性の歌はあるが、女性の歌はない。一針一針「縫

ふ」ことは、「裁つ」ことに比して、手間も時間もかかる。縫製を問題にするのは、実際に衣を仕立てる作業に従事する女性の生活実感なのであろう。また、次のように、男性は衣を仕立てることを「縫ふ」ではなく「作る」と表現することがある。

今作る斑の衣面影に我に思ほゆいまだ着ねども

(巻七・一二九六)

小垣内の 麻を引き干し 妹なねが 作り着せけむ

(巻九・一八〇〇)

白たへの 紐をも解かず」一方、女性に衣を「作る」とは詠まない。それは衣の製造過程の中でも「縫ふ」という行為に意を注いでいたが故と考えられる。

(4) 「背子の恋しさに放心した状態」(窪田評釈)、「自分の心が相手の男でいつぱいになっている情」(全註釈)、「夫中臣朝臣東人を深く思いつづけていることを述べた」(全集)、「四六時中相手を思うてやまぬ女心」(釈注)等。

(5) 万葉の恋歌における「魂」と「心」とには重なる面のあることが指摘されている(多田一臣「魂と心と物の怪——古代文学の一側面——」(美夫君志)六四、平成一四年四月)が、靈魂信仰について考えるのではなく、歌語として「魂」「心」それぞれの表現を考える際には峻別する必要があろう。

(6) 多田元「いころ」(『万葉ことば事典』平成一二年一〇月)

(7) 「安倍女郎」については、安倍女郎と同一人物であるとする説と別人とする説とがあるが、ここではその可否を問題としない。

(8) 大久間喜一郎「日本の外魂思想」(『古代文学の源流』昭和四〇年二月)は、結松・草結び・紐の呪術について、「自分の靈魂を分割して籠めること」によるものと解している。遊離魂の顕現としての霞や霧についても同様に解することができる。

(9) 拾穂抄・代匠記(初稿本・精撰本)・童蒙抄・井上新考・金子評釈・窪田評釈・私注・集成・釈注・和歌大系等。

(10) 「妻の身の上に良からぬことがあった兆」と解するものとして、全集・全注・新編全集等がある。しかし、「旅立ちの際、妻に結んでもらった紐が旅行中に切れるのは、留守宅に不吉なことがある兆とされた」(全集)、「紐を結ぶことと契を結ぶことは言葉の上ばかりでなく呪術としても関連し、紐が絶えることは仲が絶える予兆として忌んだのである」(全注)とあるように、「結ぶ／解く」、「付く／絶ゆ」ではなく、「結ぶ」と「絶ゆ」とを対偶的に捉える点で、本稿とは解釈が異なる。

(11) 万葉集中「ゆゆし」は他に十一例。うち神を対象とするものが二例(巻六・一〇二一、巻十九・四二四五)、天皇・皇子を対象とするものが三例(巻二・一九九、同異文注記、巻三・四七五)である。

(12) 小川安朗『万葉集と服飾文化 上』昭和六二年六月、六興出版

(13) この他、挽歌が三例(巻二・二一九、巻七・一四二二)、防人歌が二例(巻二十・四三三七、四三七六)あるが、いずれも対象に積極的な働きかけをしなかったことを悔やむ歌である。

(14)

Bの第三句以下が諧謔的な誇張表現と見られることについて、集成・釈注・和歌文学大系等に指摘がある。